

COSMOS ロールモデル・アンケート

～研究と子育ての両立をどのようにしてきましたか？～

Vol.2 熊本大学 八幡(谷口)彩子准教授

1989年3月 お茶の水女子大学 家政学部家庭経営学科卒

1991年3月 お茶の水女子大学大学院 博士課程前期(修士)家政学研究科修了

現在の所属機関・部署名:熊本大学教育学部

お子様の現在の年齢:7歳(二人)

1. 個人的なプロフィール

①小さいときは、どんなお子さんでしたか？

何にでもチャレンジしていました。体育を除けば、とくに得意分野・不得意分野というのもなく…。

ただ、理科の教員をしていた父の影響で科学展、国語の教員をしていた母の影響で作文コンクールの常連でした。ピアノと水泳も好きでした。

②お茶大を目指そうと思い始めたのは、いつごろからですか？

その理由は？

高校に入ってからです。家庭科の先生からお茶大の家政学部(食物)を勧められました。また、男尊女卑的な高校でしたので、女子大がよいなあ、と思っていました。最終的な決断は大学入試センター試験の結果です…。

③将来的に研究者になろうと思った理由は？ 大学教員・研究者になったのは結果論ですか？ お茶大内で影響を受けた教員や先輩は？

大学時代に出会った恩師の影響が大きかったと思います。

お茶大入学当初は、家庭科の先生になって熊本に帰ろうと思っていました。入学後、お茶大の富田守先生(家政学原論)の影響や、非常勤講師で家政学史の授業を受けた亀高京子先生(東京女子高等師範学校卒)に勧められた影響が大きいです。また、家庭経営学科の先輩にもいろいろお話を伺う機会があったことも大きかったと思います。

2. 仕事と子育ての両立について

①産前・産後の休暇は確保できましたか？

確保できました。

②子育てにどのような協力を周囲からえられましたか？

まずは何といっても夫の力は大きかったです。
ついで、実家の両親。(車で30分くらいのところに住んでいます。)

③一番大変な時期は、子供が何歳位の頃でしたか？

子どもが1歳くらいになるまではやはり大変でした。

④一番大変だったのは、どんな事でしたか？

職場復帰後は、子育てと仕事のリズムがつかめず、大変でした。
健康状態も最悪でしたし、子どもは保育園に預け始めたことにより感染症の嵐でした……。

⑤子どもの年齢に応じた対応(託児所、学童保育など)はできましたか？

これは熊本だったから可能だったのかもしれませんが、職場復帰にあわせて、希望する保育所が確保できたので本当に助かりました。

⑥子育てと研究について、各時期のその比率はどうでしたか？

幼児期は子育てが中心で、研究は1割くらいできればよい方でした。

小学校に子どもが入って、子育てにかかる時間が減ってきた分、研究の時間を確保したいと思っています。

⑦両立のロールモデルはいましたか？

私の母は教員でしたので、両立をしていました。但し、実家に母の両親と同居していましたので、核家族で子育てをしている現代の夫婦とは異なりました。

⑧両立のメリットは何ですか？

仕事が大変でも、子どもの顔を見るとほっとできること。気分転換によいと思います。

⑨成功の秘訣は何と考えていますか？

健康に恵まれないと……。私の場合は何より夫に恵まれました。

⑩研究に専念できるのは、子供が何歳位の時からですか？

ようやく研究が始められるようになったかなあ、と思っています。

⑪周りの男性の理解はありましたか？

とくに理解がなくて困ったことはありません。

⑫具体的に困ったこと、不都合なこと、苦労したことは何でしたか？

休日や保育所が開いてない時の入試業務など。子どもをみてる人の確保。



⑬自分なりに工夫したこと、何か後輩に伝えたい手法があれば教えてください。

周りの人に子育てで大変なのだということをできるだけ伝えるようにしました。




⑭助けられたこと、うれしかったことは何ですか？

保育所の講演会等で、子育て支援に有益なお話を聞く機会があったこと。



⑮今子育て中の研究者に一言。また、今後への提案があればお書きください。



まずは健康第一です。

3. キャリア形成について

①ロールモデルから、どのようなことが参考になりましたか？ (人物、時代背景、家族の協力など)

私の恩師の亀高先生は、子育て期、一度仕事を辞めておられる方ですが、そのようなライフコースがあるのだということを知る機会があったことも安心できました。いろいろなライフコースがあることを知る機会も大切だと思います。

②後輩に経験させたいこと、経験させたくないことを具体的にお書き下さい。

がんばって子育てをしながら学位論文を書かれた方のお話などをよく耳にします。それはそれで貴重なお話なのですが、もう少し、リラックスして研究と子育ての両方に向き合えるようにならないかと思います。いつ結婚・出産を体験してもキャリアが不利益とならないような社会を作っていければと思います。